御降誕八〇〇年を迎えて

― 人口減少時代の教化学２ ―

はじめに

現代宗教研究所所長　三原正資

パンデミックが始まって一年。今もなお、前途は暗い。しかもわが国の人口減少と経済の低迷は早くから始まっていた。テレビキャスターでおなじみの岸博幸氏は次のように指摘する。

> 日本の総人口が減少を始めたのは2008年からですが、15～64歳という働き手の年齢層である生産年齢人口は1995年の8726万人をピークに減少を始め（略）2017年２月時点の生産年齢人口は7630万人と、20年間で1000万人も減少してしまいました。（『オリンピック恐慌』　幻冬舎　2018）

ちなみに、本宗の信行道場修了者数は、平成元年度（1989）は188名（１期75名　２期80名　補教33名）だった。ところが、平成30年度（2018）は92名（１期38名　２期14名　３期40名）と半減している。

さて、わが国の１世帯当たりの平均所得は1994年の664万円をピークに低下、2015年は546万円と低く（前掲書）、そこにパンデミックが追い打ちをかけている。非正規労働者は増え、現在６人に１人という「子供の貧困」の解決は見通せない。そして増加する自死者‥‥。

御降誕八〇〇年のお題目に向かって
（日蓮宗現代宗教研究所／平成27年12月8日発行）

いったい世界はどこに向かっているのか。見田宗介氏は「世界人口統計で、1970年という時点の前後に、人類史的な人口転換を迎えた」というデータから予測する。

人類史の全体は、長いゆるやかな助走期と、急激で爆発的な増殖期を経て、再び横ばいの安定期に至る。　（『現代社会はどこに向かうか』 岩波新書　2018）

人口増加率が大きくなる紀元前後、インドでは大乗経典の制作・編纂が始まった。「横ばいの安定期」を経験することは、私たち仏教徒にとっても未知の領域である。

グレタ・トゥンベリ氏（2003～　スウェーデンの環境活動家）の国連気候行動サミット（2019年9月23日）における発言にも耳を傾けなければならない。

地球の生態系は破壊されています。私たちは壊滅的な絶滅期の入り口に差しかかっています。なのにあなたたちが話すことといえば、お金やありもしない永遠の経済成長というお伽話ばかり。いい加減にしてください！

このときトランプ氏はグレタ氏を「未来を夢見るおめでたい子」と揶揄した。彼女の「私たちは壊滅的な絶滅期の入り口に差しかかっている」ということばは、私をある優美な彫像へと導いた。ガードナー美術館所蔵「Votive Stele」背面の釈迦多宝二仏並座像とその中央に彫刻された蓮華像（『現代宗教研究』第55号所収「ボストン・ガードナー美術館の妙法蓮華」 岡田文弘）である。

その彫像は、二仏があらゆる生命種＝仏子を象徴した蓮華を慈しみ、育て、そして戯れているかのようである。

尾形圭照師（ヒューマンディスカバリー代表取締役・現宗研嘱託）の発言も忘れがたい。

ボストン・ガードナー美術館所蔵「Votive Stele」の背面（部分）
東魏武定元年（543）製作
画像提供：岡田文弘師（現宗研研究員）

経営者は孤独で、責任を背負い、消耗します。仏教は、自分の心を保たせてくれます。

人を大切にするためには、まず自分を大切にしなければなりません。生きる意味を考えるときに思うのが、ソクラテスの「魂の世話をする」という言葉。自分を俯瞰し、整え、肯定することで、人に優しくなれます。まずは、自分の魂の世話からですね。

（『文化時報』 2020年6月13日）

まずは、自分の魂の世話。そして人口減少時代を人々とともに希望をもって未来へ歩むこと！

劇作家・別役実（べつやくみのる）氏（1937～2020）は、詩「お魚の歌」を残した。

お魚が海の中を泳いでいる。／ なんて暗い夜だろう。／ 私の心の中に白い亡霊の様に、／ お魚が海を泳いでいる。／ 海の底には小さなキノコがギッシリイッパイ。／ お魚がボンヤリ泳いでいる。／ 暗い暗い夜だ。／お魚よ、／ 小さなキノコを一つおたべ

（『日本経済新聞』 2020年12月12日 〈舞台と人生〉内田洋一）

〈3・11〉東北の海に多くの犠牲者の姿が消えて10年。そして「暗い暗い夜」のような1年だった。令和3年（2021）2月16日、宗祖御降誕800年を迎えた。私たち一人ひとりが暗い夜の光でありたい。

誕生寺前の太平洋　画像提供：日蓮宗新聞社